



揺らく

# 一步先のあなたへ

永田 和宏

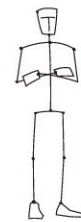


## 15 ヤバイだけではヤバくないか?

何を今ごろと言われそうだが、いわゆる若者言葉で、ヤバイという言葉の意味を聞いたときは正直驚いた。私たちが使ってきたニュアンスとはまったく逆。「あの試験どうもヤバイなあ」と言えは、落っこちそうだということだったはずだが、いつの間にか「このコピー、めっちゃヤバイ」が、すごく旨いというニュアンスになっていた。もう一つ驚くのは、若者たちのメールを打つ早さ。打てば響くようにケータイでメールを返しているさまは驚嘆に値する。実際はすべてを一字二打つていっているわけではなく、「あ」と打てば「ありがとう」と、「ま」と打てば「また今度」と変換されるらしい。予測変換機能と言おう。

この機能はすごく便利で早いから、これだけでメールをやり

取りしていたのでは、用を足すだけで、会話にはならない。コミニケーションという言葉は、本来違う価値観を持っていた人間同士が、価値観を共有するところから語源がある。最初から同じ価値観と言葉で用が足りている仲間うちでは、そもそもこの言葉は意味をなさない。



話が飛躍するようだが、近代の歌人に島木赤彦がいる。アララギ派の歌人であり、その作歌理念に「写生」を掲げていた。なぜ写生が必要なのか。赤彦は『歌道小見』という入門書の中で、「悲しいと言えは甲にも通じ乙にも通じます。しかし、決して甲の特殊な悲しみをも、乙の特殊な悲しみをも現しません。歌に写生の必要なのは、ここから生じてきます」と述べる。短歌は、自分がどのように感じたのかを表現する詩形式である。歌を作りはじめたばかりの人の歌には、悲しい、うれしいという形容詞で、自分の気持ちを表そうとするものが圧倒的に多い。これでは作者が「どのように」悲しい、うれしいと思っただけが一向に伝わってこない。のである。赤彦の言う作者の「特殊な」悲しみが伝わるのがない。形容詞は一種の出来合いの符牒なのである。

本来自分という存在は、人と違ってから自分なのであって、人とまったく同じであれば、自己という存在は意味がなくなる。その違つたことをお互いに尊重するには、相槌や共感や符牒だけで済ましているわけには行かなくなるだろう。

小さな世界の住民は、言葉

の違和感」を嫌うものである。ヤバイの意味が本来の「マズイ、危険だ」であつてもらつては困るし、それが理解できない人間にはできれば居て欲しくない。排他的にならざるを得ない。

仲間うちでしか通用しない符牒に依存していると、そのなかにいる間は心地よく安心していられるが、外の世界へ出ることになると恐怖を覚えて消極的になる。青春と呼ばれる若い時期には、何も言わなくても心を通じ合えるような友人を得ることは大切だが、自分とは考え方も感性もまったく違う友人にめぐりあふことは、それに劣らず大切なことである。自分では気づいていなかった自分の別の面を教えてくれるということにおいて大切な存在なのである。友人を通して、自分を相対化して見る視線を獲得する。それが若い時代の友人の意味である。



同調と共感ばかり、相槌を打つてばかりの友人関係ではそれは成り立たない。そこでこそ、言葉の大切さが実感される。

ヤバイ、カワイイだけで通用していた社会は、すぐに卒業ということになり、いよいよ実社会へ出ることになる。就職という課題が目の前にちらつきだすと、途端に言葉遣いが変わってくる。「オンシャは、」などと使い慣れない言葉が飛び出すようになるのを見ているのは痛々しいが、これもマニュアルな官だつたら、「オンシャ」などという出来合いの言葉を使うような若者は、いの一歩に外れしてしまうだろうと思ふのだが。

同調と共感の関係でいいはずない  
相槌だけでは実社会で通用しない  
考え方も感性も違う友人こそ必要

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人